

ドイツ古代民謡とミンネザングの成立

高 津 春 久

一一七〇年ごろから、ほとんど突然にドイツは騎士の詩と物語によって満たされる。その二、三〇年前にはまだこれの兆しすら見えていない。独創的な文学の突然の開花がまずわれわれには大きい謎と見える。ドイツの文学の歴史の中でそれは説明のつかぬ大きい不連続である。この時代にドイツ語は急に違った言葉になった。シュヴァーベン方言が教養豊かな文章語へと脱皮した。直前までドイツ語はいかにも無器用なやり方でラテン文の形式を真似ようとしていたが、このとき言葉の精神と文構造の不調和が消えた。古い民謡の調べが高貴な芸術に変わり、南フランスの調べや韻律が華麗なドイツ語に作りかえられる。ドイツ語の美音に対する聴覚が人びとの中に目覚め、思考の表れが優雅になる。ドイツ民族を迎えたこの大きい開眼は、どのような原因によってもたらされたのか。これは騎士階級が城館の中で育てあげた文化であったが、それだけの変化が民衆の中に用意されていたことは明らかである。村の野辺の輪踊り、冬の広間の舞踏でうたわれた民謡がどのような歌詞と旋律をもっていたか、それを記録したものは全くない。しかし最も古いミンネザングとその他の断片から土俗歌謡の姿を想像することは不可能ではない。そして民衆の歌が芸術的な詩に変化しはじめる段階も初期ミンネザングの数少な

い作例が示している。この時代は封建体制が人を土地に縛る力や、宗教が人の想像を規定する力に一つのゆるみが生じた。人びとがいわば異質の領域へ拡大することを許された時代といえる。騎士にとっては冒険と戦士にふさわしい行動がつねに念願であった。十字軍で見た東方の装飾と栄華が、かつて出会ったこともない物を知る喜びを教えた。美しい女性に思い切った関係をとり結ぶこと、途方もないことが想像力を刺激して、人びとは今までと違った状態におかれていた。

騎士の文芸が画期的な高まりを見せる前夜の状況を教える貴重な資料がある。一一五〇年ごろ、低部オーストリアのメルクにあったベネディクト会修道院に、俗人の身分のまま修道士として住みこんだハインリヒという人物が、当時の風俗を風刺する二つの作品を残している。『つねに死を思うべきこと』《*von des tôdes gelunge*》と『僧侶の生活』《*Priesterleben*》というオーストリア方言の対韻形式の詩に、彼は当時の俗人と僧侶の生活を存分に非難するのである。これらはドイツに現れたばかりの騎士文化を真向から批判する最初作品として文化史的にも重要な位置をしめている。

十二世紀初頭のドイツ騎士、それは十字軍と婦人奉仕によってかつてない精神の高まりを体験しようとする戦士たちである。しかも彼らの性格とその生活の実態は今なお明らかではない。詩の中で美化された騎士の思いと行動しか知らされぬものにとって、同時代の無遠慮な目がとらえたものは確かに大きい驚きを与える。このような批判はメルクのにわか修道士にだけできたことである。修道院に起居しながら俗人であり、俗界ではおそらく貴族の地位にあった。ハインリヒのようにかなりの所有地と財産を修道院に寄進し、晩年をそこの静かな信仰に捧げた高位の人物はしばしばいたのである。僧侶か俗人のどちらかであって、他の身分を批判するのではな

い。対立する二つの階級を見通せる立場にいて、地位の高さからどちらに気がねすることもなく思いきり辛辣に語ることができた。その批判は果たして僧俗の両方に及ぶ。男にも女にも及んでいる。まず『つねに死を思うべきこと』で作者の批判を受けるのは、他でもない初めてシンネザングをうたったとされるドナウ河流域の騎士たちである。およそ一四五年ごろの執筆であろう。そのころの騎士の低俗な談話を記録するハインリヒの言葉がある。⁽¹⁾

swa sich diu ritterschaft gesamet,
da hebet sich ir wechsellage,
wie manige der unt der behuoret habe.
ir laster mugen si niht verswigen,
ir ruom ist niwan von den wiben.
swer sich in den ruom niht enmachet,
der dunchet sich verswachet
under andern sinen gelichen.
swa aber von sunnlichen
der manheit wirt gidaht,
da wirt vil selten fur bracht,

騎士が幾人か集まると
すぐに話したのは

誰それが何人の女と寝たかということ
わが身の恥をかくしておけぬ

自慢の種はいつも女

一緒になって自慢できぬ男は

同僚の間で

恥をかけたと思ひこむ

一体本当の男らしさとはどんなものか
仲間うちで話することがあつても

悪魔の力に立ち向かおうというものは

wie gitaner sterche der sul phlegen,
der wider den tievel muoze streben.

da nennent si genuoge

vil manic ungehuoge.

si bringent sich mer ze scanden,

swenne si sprechent: „den mac man in allen landen

ze einem guotem chnecht wol haben,

der hat so manigen erslagen.“

(354-372)

どれほど強くなければならぬか

これが話題になることはめったにない

大抵のものが男らしいというのは

沢山の馬鹿げた振まい

「とにかくどの国へ行こうと

立派な男で通るのは

大ぜいの人をぶち殺した奴さ」など口走り

いよいよおのれの恥をさらすのだ。

宮廷叙情詩に美しく登場する騎士たちが、ここでは没理想の姿を見せている。初期の宮廷詩がどのような現実の中から、清純な言葉によって誰を教育しようとしていたのか、ハインリヒの記録がわれわれに語っている。騎士が幾人か集まると愚にもつかぬおしゃべりをしたと見える。多くは好色でふしだらな話であつたらしい。彼らの間では無差別の人殺しこそ武勇の明かしであり、どこへ行っても尊敬的であつた。宮廷詩がくり返し賛美した騎士の名誉 (etc.) は彼らの日常に基づくものではない。彼らの低級な状態を少しでも改善するため、それが奨励されたことが分かる。また騎士文化を支えた婦人奉仕の精神がこれらの人物からは感じられぬ。男たちは女を誘惑したことで野蛮な自慢を交わしている。驚くべきことに当時の騎士はこのような状態にあつた。

この無作法者らの世界にも新しい女性崇拜の流行は、西方フランスよりここドナウ河畔にわずかに運ばれたと

思われる。しかし精神の教化よりも実際には形の流行、新しいモードの追求が先走ったもののようである。十二世紀でも精神の文化は形態の文化がわけも分らず人を熱中させたあとによりやく伝わった。異文化の摂取はまず服装や生活の虚飾に始まる。形の模倣なら誰もが試みることができる。ハインリヒは下級の日傭女まで貴族の流行を真似るのを見て、ミンネの風習の軽薄さ、新しい文化の貧しさを嘆く。「路上でも教会でも卑しき日傭女の姿。そこですることはただ一つ。ひだ飾りある服のすそが行く先ざきで埃を立て、国中が一層きれいになるように服のもすそを長くする。それだけが楽しみといった風。誇らしげな足運び、頬には異国の紅をぬり、髪に黄色いリボンつけ、いたる所百姓女が、貴族の娘に負けるまいと、大げさな衣装を引きずったり、またけり出した。」(319-333)この時代にめずらしい風俗批評の詩。この半僧半俗の人こそ不断からまわりの様子を適確に観察して、貴重な記録を残してくれた。

メルクで書かれたこの詩は、ミンネザングが十二世紀半ばすでにオーストリアの騎士の間でうたわれたことを示す記述を含むことで有名である。宮廷生活のさまざまな楽しみに詩人は宗教家の立場から警告を与えている。死んだ夫の姿をよく見つめるよう彼は貴婦人に呼びかける。信仰を離れた生活に酔うて何の意味があるう。亡き人の醜い屍を見てよく悟るがよいという。「美しき婦人よ、さあ近寄って君のいという夫を見たまえ。夫の顔の様子はどうか、頭の天辺で分けた髪、なでつけた髪はどうなっているか、よく調べたまえ。真剣に見つめたまえ、夫が人目もはばからず、またはひそかにその目差しを君に向けていたときと変わらさず今も楽しそうか。貴婦人の虚栄の美を彼が称えていたときの陶然たる目差しは今どこにある。」(597-609)

nu sich, in wie getaner heite

さあ見たまえ、夫が恋の歌を

diu zunge lige in sinem munde,

舌動かせ楽しくうたうことのできた

da mit er diu trutliet chunde

その舌が今口の中で

behagenlichen singen!

どんな風にこわばっているか

nu nemac si niht fur bringen

今じゃ言葉も声も

weder wort noch die stimme.

(610-615)

そこから出すことができるまい

「短く刈りそろえたひげあるあごはどこに、君の全身を愛撫し抱いたその手のひらをつけた腕が、今無様に横たわるのを見たまえ。貴婦人と連れだち優美に散歩していた足はどこにある。…そのワイシャツに君が絹ひもをくぐらせては、いくつも大きいひだを取って進ぜたお方が、今ではまるで変わりはてた姿ではないか。夫のお腹をご覧。そこはまるで舟の帆のようにふくらんでいる。屍衣からは臭い蒸気が立ちのぼる。だから夫はもう君とともにこの世で暮らすことのかなわぬ人だ。」(616-635)

このころ騎士を夢中にさせた宮廷生活の新様式も結局は無意味な戯れにすぎぬことを死は教える。ハインリヒの意図は美しい事物の表をはいでその実体を暴露することにあった。騎士の恋愛詩と新しい服装の流行についても他の資料からうかがうことのできぬことを教えている。このころ騎士は宮廷生活を中心に美の規範を発見し、強い宗教的規制をのがれて自由な生活の喜びを知りはじめた。十二世紀は中世がルネッサンスを体験した世紀といえる。十字軍による東方との接触、異常な感覚世界の拡大が、人びとの心をさらに常ならぬものの発見へと向

かわせた。感受性の異様な高ぶりがドイツ語の詩と物語の創作をうながし、またそれらを洗練した。この時代の胎動と自由へのあこがれをハインリヒ・フォン・メルクの無遠慮な筆致がよく伝えている。騎士の下着に絹ひもを使った優美なタックがあったこと、短く刈りそろえたひげ、頭の上で美しく左右に分けた髪が男性貴族の美貌を輝かせた。美男美女の優雅な社交は騎士の恋愛詩——ミンネザングといわず、まだ《*trübe*》というおぼつかない名であったが——の朗唱によって美しく高められた。宮廷社会は自ら作り出した審美的な発明にまだ好奇的な感動すら覚えていた。それはまだ新しい形の流行にすぎなかった。死ねばたちまち失せる形式にすぎぬことをハインリヒは貴婦人に訴えている。形が精神を高める段階にはまだ遠かった。高尚な憧れが生活を律するには一一八〇年代のフリードリヒ・フォン・ハウゼンの歌やさらにラインマルの詩が現れるのを待たねばならなかった。しかしとにかく宮廷社交に必須のものとして、騎士の求愛の歌があったことがここに初めて記録されている。一一五〇年より前のオーストリア貴族の愛の歌が、何をいかにうたったかは知ることができない。トゥルバドゥールが一一四七年の第二回十字軍に参加してバイエルン、オーストリアをドナウ河ぞいに東へ通過したことがある。エレオノール王妃に従う彼らの歌の詩形と調べがドイツ語の歌と全く違うのでドナウ河流域のドイツ詩人は大へん驚いたといわれる。ここに異国の詩が大きい刺激となって、ドイツの叙情詩は整った詩形と柔軟な表現を達成する。その内容も省察の深さをとみに加えた。メルクのハインリヒが伝える《*trübe*》は十字軍東征を契機としてドイツ語の詩が変化しはじめる前の歌であったに違いない。それはドイツ固有の歌、なお民族歌謡の伝統に属する歌であった。民族歌謡はこの時期からは二世紀、フランス風の婦人奉仕の歌がドイツの宮廷を支配している間、いわば高尚なミンネザングのアンティテーゼとして地下に蓄えられていた。やがて古い民謡の精神は、ナ

イトハルトの歌などに復活し、精神的なミンネの歌を冷笑する形で並行して生き永らえる。

デア・フォン・キューレンベルクの歌はハインリヒ・フォン・メルクに見える騎士の歌が土俗歌謡から分かれる興味ぶかい時点を明かしている。多くの人から指摘されたように、彼の作歌態度には不思議な分裂が見られるといつてよい。W・シェーラーはキューレンベルガーの男の歌と女の歌の間には埋めようのない谷間が口を開けている、といった。彼の騎士の歌は愛の征服者としてつねに誇らし気であり、欲情が強く、女性に向かって粗暴である。女性の歌の多くはモノローグであり、騎士とは違ったデリケートな詩句で男への思いを打ち明ける。⁽⁸⁾

Swenne ich stân aleine in minem hemedē,

下着のまま ただ一人いて

und ich an dich gedēnke, ritter edele,

気高い騎士よ あなたを思いますと

so erbluēt sich min varwe als der rōse in touwe tuot, 私顔は朝露にぬれたバラのように輝いてまいます
und gewinnet daz herze vil mängen trūgen muot. 心はいつの間にか 悲しい深い思いにとりつかれています

(MF 8, 17)

繊細な女性の告白の調べに男が返すのは思い上がった好き者の言葉である。

Wip unde vederspil diu werdent lhte zam:

女と鷹は すぐに手なずけられる

swer si ze rehte lucket, sô suochent si den man. 誘い方さえ会得すれば 向こうからこちらを求めてくる

als warb ein schone ritter umb eine frouwen guot. ある美貌の騎士がその心得で よき貴婦人の愛をもとめた
als ich dar an gedenke, só stêt wol hâhe mîn muot. おれがそれを思つたば 心は喜びに高まるのだ

(MF 10, 17)

真剣に愛を求める女性を前に、好首尾に酔う策略家の言葉は太々しい。女性の詩節が最後に悲しみを訴えるとき、貴婦人を物にした男の詩の末尾は喜びに高まる。男が求め女が拒否するのに決まっていた婦人奉仕、それをつたい続けたミンネザング二〇〇年の歴史の中で唯一の例外ともいえる詩人である。しかしこれらの詩節は一一五〇年、それ以前のドナウ河流域における求愛の実状によく合致した表現であつたに違いない。ハインリヒ・フォン・メルクが伝える騎士の女性談話はキューレンベルクの愛の征服者の詩節と共通のものを持っている。女性の体を奪うことに熱心で、それを楽しみに生きている男たち。彼らも鷹匠と同じく愛を誘いの技と考え、過去の成功を思い返しては満悦したであろう。キューレンベルクの詩人が女性にうたわせる言葉は同じ詩人の造形と思えぬばかりに無垢である。就寝前に一人告白する女性の姿をえがいて恋への没我を美しい映像とした。好色の騎士を相手とするには惜しむべき可憐さを示している。

キューレンベルガーの歌と同じ時代に作られたミンネザングの多くは、婦人が独白的に愛を告白する歌である。後の宮廷叙情詩は騎士によって一方的に崇拜される抽象的な女性の姿を描き出す。そのころの貴婦人は長年の騎士の奉仕に対して好意的な視線一つ、または一言を返せば十分であつた。彼女は行為せぬ女性である。北極星のように満天の星を走らせつつ自らは動かない。しかしドナウ河流域で一一六〇年以前の歌に現れる女性は愛

に悩み、ためらい、恋人として行動する。彼女自身愛の体験のない手となり告白者となる。この時代の婦人の歌はあこがれ、あきらめるにも没我的であり、女性の言葉として感動させるものを持っている。一一八〇年代よりの後の宮廷詩には貴婦人と騎士の愛を封建領主と臣下の関係に置くような抽象的なものが多い。それより三十年前キューレンベルガーの歌では愛の官能が強く言葉を動かしている。この時代、愛の完成は肉体の合一とされ、女性からの献身がこだわりなく口にされた。このころの婦人のモノローグは実際に女性によって作られたものである。少なくともK・ブルダハはそうに考える。ミンネザングが最盛期を迎えると痛切な婦人の告白はなくなる。あるとすれば婦人の作ったものではなく、役割の歌 (Rollendichtung) として詩人の空想が婦人に語らせているにすぎぬ。

デア・フォン・キューレンベルクやディートマル・フォン・アイストの歌を読むとドイツ叙情詩の原点にふれたように感じられる。これらは外国文化の影響をまだ受けていない詩である。当時のドイツ人の習俗と感性を純粹な形で反映しているに違いない。しかし貴族階級の芸術的な詩として、詩形を整え、男女の詩節を意識的に対立させ、それぞれ特色のある叙情空間を作りあげている。春の花を称え、恋人を踊りの輪に招くといった内容の単純な同時代の民謡と一線を画した歌である。ドイツに民謡が生まれる段階からどういう筋道を通して騎士の叙情詩が分かれたのか、その過程を考えてみたい。

古代と中世を通じ宗教や政治の重要事項の伝達に用いられたラテン語の文書はよく残っているが、民衆の暮らしとともに生まれては消えて行った土俗歌謡の類は確かな形でわれわれの目に触れることがない。ミンネザングの発生が民俗歌謡の伝統につながると考える学者は、母体を確認するためさまざまな資料を調査した。ウーラン

トやブルダハがまず注目するのは、西暦七八九年三月二十三日にカール大帝が出した勅令 (Kapitular) の内容である。この勅令は修道尼が「世俗の歌」《winliedi》を作り人に送ることを禁じている。この世俗の歌は恋愛を内容としたに違いない。ラテン語の勅令文の中で《winliedi》というドイツ語を用いる。《wini》とは友、または恋人のこと。つまり八世紀に個人的な気持をドイツ語で打ち明ける恋の歌が存在したのである。勅令は修道院規則の及ばぬ小さい修道院に住む修道女を対象にしている。「いかなる修道院長も自分に託された修道女がわれらの命ずるときを除き、院より外出することを許されぬよう要望する。彼女らの部屋には鍵をかけておくこと。修道女は部屋で世俗の歌を書いたり人に出したりしてはならぬ。また瀉血して青ざめた顔付をするなどは許せぬこと。⁽⁸⁾」

これら寮にいる女性は「修道寮住まいの貴婦人」 (Sultsdame) であった。多くは貴族の娘であり、修道院学校でラテン語教育をうけ、年若くして聖職俸給を支給された。それでいて長く僧院に暮らす義務もなく、いつなりと世俗の生活にもどり結婚することもできるのであった。このように自由のきく修道尼の存在はカール大帝の氣に入らず、取締り条例が出ることとなったのである。修道中の貴族の娘たちは恋愛詩を作って男に送っていたらしい。目にあまる行為として大帝はとくにこれを禁じた。勅令を出してまで制止せねばならぬほど多くの恋愛詩が作られていたものと見える。《winliedi》という語はこの時代に公会議で定めた戒律に対するドイツ語注解に用例が十二ある。それらは「俗語賛美歌」《plebeius psalmus》に対するドイツ語の訳語として用いられている。この後の用例は十三世紀まで途絶える。ナイトハルト・フォン・ロイエンタールに好色な若い農夫が祭の日になうたう歌が《winliedi》 (62, 33) 《winliedi》 (96, 14) と呼ばれている。ラテン語の教養ある八世紀の僧が俗語

の歌《winiiod》を軽んじたように、十三世紀の貴族歌人ナイトハルトも《winieliet》によって古風な村の大衆歌をからかったのである。カロリング朝から十三世紀初頭まで《winiiod》はまず僧院のラテン語文化へのアンティテーゼとして、後にはミンネザングに代表される宮廷文化へのアンティテーゼとして、ドイツ語による即興的恋愛歌、恋の俗謡を意味した。これは羊皮紙に記録できるような形式を整えた歌ではない、瞬間に口をついて出る思いの表白、または呟きである。芸術とは縁遠い、それだけに本能的に生な形をとるものであったと想像される。《winiiod》の作例が一つとして伝わらないのは、恋の当事者だけの、その場限り忘れられて行く告白だったからであろう。初期叙情詩の記録がないのは、叙事詩の内容のように国民共通の遺産として記憶に止めようとされなかったからである。叙事文学の堂々たる存在のわきで、泡のように生まれては消える日常的な初期叙情詩は数多く作られたであろう。例えばこれに続く九世紀には路上で踊ったり、また屋内でみだらな歌を口ずさむことを禁じる教会法があった。俗謡的な恋愛詩が流行しつづけていたものと思われる。しかしそれらがどのような歌であったか今では知るよしもない。八世紀に修道女の作る恋歌という形で初めてドイツ語恋愛詩の存在が明らかにになったが、その後の明確な恋愛詩の記録は十一世紀半ばまで途絶える。

およそドイツの文学作品で騎士が初めて主人公として登場したのはルオドリエプ(Ruodlieb)と呼ばれるヘクサメーターのラテン語の物語である。一〇三〇年から五〇年ごろまでにテーゲルンゼーの修道僧によって書かれた。郷里で不遇であった若き騎士ルオドリエプは旅の途上知りあった狩人の紹介で、ある王に仕えることとなった。王の寵愛を得て月日がたつ。国の母から帰国をうながされ、彼は帰ることにした。王は今までの忠節に報いてルオドリエプに十二の教訓を垂れる。また帰国してから切れといって金銀を包んで焼いた二つのパンを手渡

す。帰路、ある村で赤毛の悪漢と知り合い、王の教訓を早速破ってしまう話。国に帰ってから結婚するよう母にいわれ、ある貴婦人に求婚の使者が立つ話。物語の末尾は欠けて伝わらない。物語の素材は作者をとりまく現実の生活から取られ、生活風景が格別具象の色彩に富むので、この作品は文化史的に重要な記録を含んでいる。異国の王の宮廷の慣習や歓迎式典や戦いのあとの講和の様子が詳細に報じられる。王様の昼寝さえ作者は語っている。上流の生活だけでなく、農夫の暮らしよりも忠実に詳しく再現されている。僧侶の書くものとしては珍しく、どの人物にも生きた性格描写が施されている。ルオドリエプは中世の写実小説としてならぶものがない。末尾以外にも欠けた所がいくつかあるが、現存するのは二三〇行ばかり。作者は主人公をさまざまな生活環境に置き、若い騎士が人どのようにつき合うべきかを示している。人物の多くは無名で登場し、主人公も国を追われたものと呼ばれている。彼が出会う人物もただ王様、狩人、母親、身内という風に抽象的に示され、聞き手の関心をただ事物の教訓的な意味に向けようとしている。それでいてここに現れる事件や人物は、この時代にあり得た類型をよく写している。そのラテン語は作者が日ごろ生活の場で用いた中世のラテン語であり、古典文学の色彩をもたぬ。どの部分の描写も好ましい細密画法で成っている。このように写實的に宮廷生活が紹介された中に、貴婦人より騎士に送られる「愛の挨拶」が記録されている。それは実際の恋人同志の遣り取りを伝えるものと考えられる。

ルオドリエプの母は息子に結婚の相手を探すように求めた。親戚の集まる席で彼は適当な人を教えてほしいという。中に近隣の国々の事情に詳しい人がひとり立ち上がりいうには、人物も血筋もあなたにかなう立派な女性が一人いる、会えばこの世に二人といない人だとあなたも思うだろうと。ルオドリエプは親しい友人を使者に立

ててこの婦人に求婚する。使者と貴婦人の対話もこのような状況で当時実際に話されたらしい言葉である。「貴婦人はふたたび部屋に入ってきて、使者のため黄金の水差しに入れた特上のワインと甘い蜂蜜酒をすすめる。使者の前に立ちながら、お国のご婦人は容貌のすぐれたお方が多いのでしょうか、ご品行のほどは、また貞潔や名譽を大切になさいますか、と彼女はたずねる。使者は微妙な笑みを浮かべながらいった。おたずねの点はよく存じません。それに私は今までご婦人方の一挙一動を注意して見たことがあります。そんなことを気にするのはにやけた男とします。道を歩いていてご婦人がそばにおられますと、ただ一礼して通りすぎます。それよりも私が国に伝えるあなた様のお言葉を、ルオドリエ様へのあなたからのお言葉をお聞かせ願います。それに答えて貴婦人は

Dic sodes illi nunc de me corde fideii

私は誠の心こめて、かのお方に最高の幸せを

Tantundem liebes, veniat quantum modo Ioubes,

お望みするとお伝えなさい。樹々に葉の萌え出るほどに

Et volucrium wunna quot sint, tot die sibi minna;

また小鳥の喜びほどあまたの愛をかのお人にお伝えなさい

Graminis et florum quantum sit, dic et honorum.

また草と花の咲ける数ほどあまたの尊敬をお伝えなさい」

求婚承諾の言葉である。この詩句がラテン語の中にドイツ語の押韻を象眼している所から (*liebes-Ioubes,*

wunna-minna)、この愛の挨拶は古くから知られたドイツ語の歌謡をラテン語に翻訳したものだとうーラントは考えた。⁽⁵⁾ 騎士のミンネザングが消えたあと、十四、五世紀に民謡が叙情詩として復権する。その時代に同形式の

挨拶が再び多く聞かれる。

Ich wünsch ihm all das beste,

so viel der baum hat äste.

Ich wünsch ihm so viel gute zeit,

so viel als stern am himmel sein.

Ich wünsch ihm so viel chre,

so viel als sand am meere.

(6)

R・M・マイヤアは「このドイツ詩の基本構造は奇しくも太古ゲルマン詩の残存であろう。」とさえいつている。このような見方からもしルオドリエプの愛の挨拶がラテン語詩人のオリジナルでないとすれば、これがドイツのミンネの詩の形態を明かす最初の例証となる。ドイツの叙情詩はこれよりも先にすでにあったはずである。祈祷詩、頌歌、抗議の歌の類はこれより早い時期の作例が多く残っている。詩情豊かな愛の歌がどうして一一五〇年ごろまで記録されていないのであろう。すなわち中世ヨーロッパは大きい精神的な変容をこの時期に体験した。中世人の生活感情はこのころ明らかに変化したといえる。キリスト教は本来人間の魂が犯す罪科に格別の恐れをもっている。宗教教育はしがつて自己の魂ときびしく対決することを求めた。懺悔と贖罪により汚れ深きわが魂を見えるよう人びとを習慣づけた。自分を問いつめ、自己について内省的であるよう人は日頃から教育

されていた。しかし十二世紀半ばから、ここに明らかな変化が見えてくる。それまでの教義に縛られた厳格な信仰から出て、個人が宗教的体験において自主的であろうとする。愛は罪深き魂の傾斜とされた時代である。人びとは恐れながらこの方向にも省察をこらした。愛への思念は中世では罪科と危険の意識を伴った。しかし愛についての内省は俗人にとって最大の関心事となる。このとき愛の叙情詩がそれまでにない精彩をもって数多く現れるのは、中世人の心が強制され教えられる立場から自ら省察する姿勢を回復した明かしである。民俗歌謡の惰性的、習慣的な表現がミンネザングのきびしい省察に変化したのは当然の成り行きと見られる。

十二世紀ドイツの宮廷的叙情詩の発生を考える学者の間に對立する二つの立場がある。一つはカロリング朝の昔から庶民が春の祝祭などにうたっていたドイツ語民謡から自然発生的に宮廷叙情詩が生まれたとする見方である。L・ウーラント、K・ブルダハ、W・シェーラー、R・M・マイヤなどがこの流派を代表する。最近ではデ・ボアの文学史が初期のミンネザングはドナウ河流域の古い土俗歌謡を母体として生まれたとするのもこの立場に属している。これに対してH・ブリנקマンは一九二六年の『ミンネザング成立史』《Entstehungsschichte des Minnesangs》の中でミンネザングは僧侶や学僧の間に伝わるオーヴィド以来の愛の理論とラテン語恋愛詩が騎士階級に伝えられて生まれたとする。J・シュヴィーテリングもブリנקマンとともにこの見解を表す。二つの見方がそれぞれ自説を有利にする例証をかがげて對立している。

ブリנקマンは「民衆が自分たちの歌謡をもっていたことは否定しない。しかしそれは精神的に幼稚な村の歌であって、ミンネザングと明らかに性格を異にするものである」という。⁽⁷⁾ 叙情詩というものはもとより文学的に独立した形式を持っていなかったから、キューレンベルガーに見られるように叙事詩の詩形を用いなければな

らなかった。デイトマル・フォン・アイストのように中世ラテン語の詩のリズムや詩形をドイツ語で実験しはじめると、初めてドイツの詩は叙事詩に依存することを止める。つまり叙情詩に固有の詩節形式というものはミンネザング以前に存在しなかったから、土俗歌謡から最初のミンネザングが發展成立したとは考えられぬというのである。しかし芸術的な詩節形式を民謡が持たなかったために、または民謡が精神的に幼稚であるからといって、それがミンネザングの發生にとって無縁だとはできない。最も早い時期のミンネザングはすでに愛について象徴的な叙情空間を示している。踊りの輪に加わるような人びとに呼びかけるような民謡とでは芸術と非芸術の違いを見せている。しかしこの芸術は日常的・非芸術と同じドイツ語を用いて作られたものである。R・M・マイヤアが作った芸術と非芸術にわたる類似表現のリストは、意識的芸術が非芸術表現から素材をくみあげ、それを好ましいリズムと形式に仕上げる過程を示している。⁽⁸⁾

民謡や日常生活の言葉は詩人の母国語である。その響きとリズムを詩人はわが血肉のように愛し、深く理解している。だからそれは芸術的造形の素材として外国語を用いるより大きい成果を詩人に約束するであろう。ブリンクマンは最初のミンネゼンガーの芸術が古代ラテン詩人や中世の修道僧と尼僧の間に交わされた恋愛書簡から大きい感化を受けて生まれたという。異質の言語との差異、また僧と俗人の隔たりをこえて新しい芸術の發生をうながすということに大きい不自然を感じる。初期ミンネゼンガーの男性詩節の粗野と肉欲はむしろ單純な民謡の精神と共通の範疇にある。

ブリンクマンの仮説の大胆さはキューレンベルガーの詩の解釈によく表れている。「キューレンベルガーの婦人の詩節は詩人もその中の一人である一つの空想世界へと聞き手を導くものである。これらは初期の未熟な詩句

とは大へん性格の違ったもの、明らかに芸術的に創作された叙情詩（Kunstlyrik）である。中世初期の詩人が全く自分一人でこのような芸術詩にいたる道を開いたとは考えられない。このような分野では影響と感化が相互に働く。西歴一〇〇〇年ごろの最初の中世ラテン語の恋愛詩がすでに婦人の嘆きの歌（Frauenklage）を知っている。最初は尼僧によってうたわれ、その後世俗の婦人にもこの歌は伝えられた。婦人の嘆きの歌は何か間接的な経路でキューレンベルガーの知るところとなった。当時一般的であった影響のルート、僧侶階級に生まれ騎士に伝わるという道を通ったのである。⁽⁹⁾「プリंकマンは婦人の歌がこのように屈折した道を通りキューレンベルガーの歌となったとするが、同じ詩人の騎士の歌は素直に当時の騎士の思いを伝えたものと考える。その多くは一般的格言で始まり次に男の個人的見解を語る。これは騎士としての誇りをそのままいい表わした部分である、とする。

キューレンベルガーの男性騎士の詩節が、そのころの男の気持を特別な虚構によらず、あるがままにうたっていることは、どの聞き手にも直感されることである。婦人のモノローグがその土地の歌謡に先例を持たず、尼のラテン語歌謡に起こり、世俗婦人のラテン語歌謡を介してキューレンベルガーのドイツ語歌謡になったというのは納得できぬことである。一人の詩人が婦人の詩節と騎士の詩節でそれほど違った手法を用いることは不自然なことである。今日伝わる最も古い婦人のモノローグ、キューレンベルガーよりもさらに古い時代に生まれ偶然に残ったと思われるものが、そのような経路を感じさせず、自然発生的な婦人の失恋の嘆きを直感させるのと同じく、キューレンベルガーの女性の詩節もこの時代の婦人の口をもれ出た悲しい肉声と感じられる。プリंकマンによれば、キューレンベルガーの対唱（Wechsel）なども男の僧と僧院学校の教え子の間に交わされたラテン語

の愛の往復書簡を手本として作られたとされる。しかしラテン語散文からドイツ語の詩への隔たりはあまりに大きく間接的に過ぎる。

「女性の詩節、男性の詩節を一つにまとめようという考えを中世ラテン語文学からキューレンベルガーは思いついた。彼はそれをただ口真似したのではない。婦人のうたう詩句に彼はモノローグの性格を与えた。それが彼の婦人の詩節にはふさわしかったのである。それとともに彼は自分の詩にふさわしい客観的な情景を女性の詩節に与えようとした。女性の詩句はそれによって男の詩句がもっと主観的なものに対して、さらにきびしいコントラストをえがき出し、詩の構成が明瞭になった。」現代の詩人のように知的な計算をキューレンベルガーの創作に推定するのであるが、プリנקマンは当時の詩人があまりに作為したと考え勝ちである。騎士階級の母国語の詩の源をつねに僧侶のラテン文学に求めることにも大きい作為が見られる。

R・M・マイヤアは一八八五年にミンネザングが古いドイツの民衆歌謡を源として生まれたことを実証しようとした。^m詩集『ミンネザングの春』、ヴァルター、ヴォルフラム、カルミナ・ブラーナの中のドイツ語の詩句、また歌の性格が民衆歌謡に近いため、かえってミンネザングの初期につながるナイトハルト、これらの中にくり返し出てくる同種の表現を網羅している。

des mohte mir min herze nie frô werden sît. (Kürenberger MF 7, 25)

frô envirt er niemer. (Meinloh MF 14, 11)

sch, sô wurde ich niemer mêre frô. (Johansdorf MF 91, 35)

ドイツ古代民謡とミンネザングの成立

sône wirde ich niemer frô. (Reinmar MF 171, 34)

ja enwirde ich niemer rehte frô. (Walther 74, 13)

got sende si zesamene die gerne geliep wellen sin. (Kürenberger MF 9, 11)

schein uns zwei lieb zusamen die gern bei einander wollen sein. (Uhlend 75, 1)

got bliet die frumen knaben die allzeit vol wîln sein. (Uhlend 233, 11)

dem du bist, frouwe, als der lip. (Meinloh MF 11, 15)

diu mir ist als der lip. (Meinloh MF 12, 32)

der mir ist alsam der lip. (Hausen unecht MF 54, 18)

und daz si mir ist liep sam min selbes lip. (Hausen MF 43, 31)

si ist mir liep alsam der lip. (Rugge unecht MF 99, 39)

このような同じ表現が複数のミンネの歌人にしきりと現れることは、彼らがその表現をくみ上げた源流が同じであることを物語っている。しかもミンネザングが成立する前に彼らの日常生活や祝祭の日の歌謡に用いられ、歌の聴衆にとっても聞きなれた表現であったに違いない。ラテン語の文化にかかわらない男性騎士がミンネザングの聞き手であった。ラテン語の詩の表現を訳して直ちにその妙味を解する人たちではなかった。マイヤアはと

くに古い詩の表現がよく残されている自然序詞 (Natureingang) について、カルミナ・ブラーナのドイツ語詩やナイトハルトの詩を分析した結果、ラテン語の詩の表現よりも古いドイツ民謡からの由来をより自然であると断定する。古典ラテンの詩は風、雨、川などエレメンタルなものの描出を重んずるが、ドイツ語の詩は微妙にゆれ動く生命的なもの、森、花、小鳥などを詩にうたおうとする。マイヤアはドイツ歌謡の自然序詞の本来の姿をよく保つものとしてディートマル・フォン・アイストの二つの詩句をあげる。

Ah! nu kunet uns diu zit, der kleinen vogelline sanc.

ez grunet wol diu linde breit, zergangen ist der winter lanc.

nu siht man bluomen wol getân: an der heide üebent sie ir schîn. (MF 33, 15)

Sich hât verwandelôt diu zit, daz verstan ich bi der vogele ringen:

geswigen sint die nahegal, si hânt gelân ir süezez singen,

und valwet obenan der walt. (Pseudo-Dictmar MF 37, 30)

カルミナ・ブラーナのラテン語の詩の自然描写とミンネゼンガーのそれとの間には本質的な相違がある。ラテン語の詩人は大きく華麗な描写を展開するが、ドイツ語の詩人は短く鋭い素描だけに止める。遍歴学値はことに華美なものを好むので春の花のあでやかさを強調する。《quovis flore picturato》(79, 2) 《picto terre gremio

vario colore》(92, 1) などである。色彩表現でもドイツの民謡に欠かせぬ「緑」がこれらラテン語の詩には欠けている。ドイツの詩人は春の緑を称える。あるいは花の美しさをうたっても「赤き花」か「バラ」を語るだけである。《bluomen also rôt》(Meinloh MF 14, 2) 《die rôschbluomen》(Dietmar MF 34, 8) 《rôsen》(Neidhart 14, 23) マイヤーはこのような判別を初期のシンネゼンガーやカルミナ・ブラーナのドイツ語の詩の表現に試みて明確なドイツ民謡の素地をそれらに認めるのである。彼はカルミナ・ブラーナのドイツ語の詩の中から古代のドイツ民謡がほとんど変形されず伝えられたものとして舞踏歌では《140 a》《167 a》を、春の歌では《144 a》《152 a》《178 a》を、恋愛詩では《149》《174 a》《180 a》を選び出している。この中で《144 a》と《149》はディートマル・フォン・アイストの詩にかなり近い情緒表現を持っている。

Ich han gesehen, daz mir in dem herzen sanfte tuot:	Gruonet der walt allenthalben.
des gruenen loubes pin ih worden wolgemuot;	wa ist min geselle also lange ?
diu heide wunnechlichen stat;	der ist geriten hinne.
mir ist liep, daz si also vil der schonen bluomen hat.	owi! wer sol mich minnen ?
(CB 144a)	(CB 149)

初期宮廷詩人がこれらの作品を基礎にすれば、わずかの整形と潤色によって彼らの詩を作ることができたはずである。ヴォルターとヴォルフラムはことに民謡的表現から多くをとり入れた。ヴォルフラムの場合は彼の叙事

詩の表現にまで積極的なとり入れの跡を認めることができる。ブリנקマンの次のような否定は不思議にさえ感じられる。「ミンネザング以前にあった初期の民衆叙情詩の性格はわずかに残った作例と中世ラテン語の詩から推定することができる。それらは舞踏に合わせてうたわれた歌、あるいはバラード、また舞踏に加わるような人がうながす歌であった。初期のミンネザングが古い民衆歌謡を芸術的レベルの歌に引き上げたのではないことは明らかである。でなければ二つの間に幾つかの関連が見えねばならぬはずである。」この判断は十九世紀に示され、なお説得力を失わぬマイヤアの一つ一つの例証に應對していない、独断的なものといえる。

一一八〇年以後、フリードリヒ・フォン・ハウゼンらのミンネザングはプロヴァンスの歌やラテン文学を自らの中に進んでとり入れた。しかし成立時点の古いミンネザングはカロリング朝から民衆の詩の中で純粹培養されてきたものを、急に目覚めた感性の力で芸術的な詩に形成したに違いない。ドイツの民謡歌人は長い訓練の結果、かなり多くの定形的な表現を十二世紀には固めていたはずである。宮廷叙情詩が外国の歌の手本を真似るにも、母国語の歌謡の表現の下地が十分でなければそれは不可能に近いことである。最初のミンネの歌人が試みたのは昔ながらの表現法をとりながら、内容よりも形式に磨きをかけることであつたろう。テキストよりもメロディを整えたと思われる。あらゆる芸術はそれが頂上を目指す前に、機械的な技巧を一通り完成させるものである。ミンネザングは一一七〇年までの跳躍前助走の段階で、土俗歌謡が準備した定型表現のすべてを吸収した。極致の開花の瞬間、不要となった職人の道具はすべて投げすてられる。完成期のミンネザングは教養人らしいとりすました顔をするが、その境地に入るために彼は長らく民衆の本能のお世話になった。貴族の芸術と民衆の芸術が触れ合うことを止めたとき、前者にとってはそれが崩壊しはじめるときであつた。

(註)

- (1) Die religiösen Dichtungen des 11. und 12. Jahrhunderts. Herausgegeben von Friedrich Maurer. Tübingen 1970 Bd. III S.321f.
- (2) ホー・フエン・キアーレンベルクの歌の本文は次の版による°
Des Minnesangs Frühling. Nach Karl Lachmann, Moritz Haupt und Friedrich Vogt neu bearbeitet von Carl von Kraus. Leipzig 1940.
Zfda. Bd. 53 S.81.
- (3) *De monasteriis minimis ubi nomines sine regula sedent, volumus ut in unum locum congregatio fiat regularis, et episcopus praevidet ubi fieri possint. et ut nulla abbatisa foras monasterio exire non praesumat sine nostra iussione nec sibi subditiis facere permittat; et earum claustra sint bene firmata, et nullatenus ibi vinivendos scribere vel mittere praesumant: et de pallore earum propter sanguinis minutionem.*
- (4) Denkmäler deutscher Poesie und Prosa. Herausgegeben von K. Mullenhoff und W. Scherer. 4. Ausgabe Berlin/Zürich 1964 S.67
- (5) Ludwig Uhlend, Schriften zur Geschichte der Dichtung und Sage. 1865-73 Bd. 3 S.261
- (6) Karl Simrock, Die deutschen Volkslieder. 1851 S.171
- (7) Hennig Brinkmann, Entstehungsgeschichte des Minnesangs. Halle 1926 S.103
- (8) Richard Moritz Meyer, Alte deutsche Volkslieder. Zfda. 29 (1885) 121-236
- (9) H. Brinkmann, a.a.O. S.110
- (10) H. Brinkmann, a.a.O. S.115
- (11) R.M. Meyer, a.a.O.
- (12) H. Brinkmann, a.a.O. S.91